

桜が咲いて、散って…
毎年のことながら、あつという間だなあ、と地面に落ちた花びらを見る。

散り際がいい、という思い入れで、軍国主義の時代に桜のイメージは利用されたみたいだ…「死んで来い！」ということだ。

桜は、花を咲かせて散っただけ、ただ懸命に「いのち」を生きただけで、その在りようを見て人は、美しいと素直に思っただけのことなのに。

小賢しい奴が、「政治」に都合よく利用したんだな。

昔も今も「政治」は、利用することばかり考えているんだ…。生きとし生けるものの「いのち」を利用する、という眼差しでしか見ようとしないのは、嫌な感じだな。

桜は、ただ咲いて、散るだけなのに…
「いのち」は、生きて、死ぬだけなのに…

42年間、撮り続けた「奈緒ちゃんシリーズ」の撮影の舞台は、横浜市の郊外にある住宅街、奈緒ちゃん一家の暮らす二階建ての家と、すぐ側にある小さな公園だ。

公園には、日本の普通の風景に欠かせない桜の木が二本、春になると約束通り花を咲かせ、散っていた…。

私たちのカメラは、来る年も来る年もその桜を撮り続けて来た。

42年間撮り続けた、奈緒ちゃん一家の日々同様に、公園の桜を撮り続け、編集を重ねるうちに、見ようとしているものの在りかが、ようやく分かりかけて来たような気になっている。

桜が、咲いて散ることの繰り返しだが、教えてくれたのだ。

言葉にすると、ちょっと恥ずかしいけど、それは一言で言うと、
「いのち」なのだと思う。

「長くは生きられない…」と言われていた奈緒ちゃんが、医療や薬のバックアップ

に助けられながら、生きながらえたのは、奈緒ちゃんのお母さんに言わせると、「奈緒の生きようとする力」によって始めて可能になった…。赤ちゃんの頃から、今に至るまで、ずっと「生きようとする力」によって生かされたように思える、と。

「奈緒には、“いのち”のようなものが見えていたような気がする…。見えるようになったのかもしれないけど…そうとしか思えない」と言っていた。

「いのち」は、ただただ生きる方向を向いているのだ。

いつの頃からか、奈緒ちゃんが口にするようになった言葉「やさしくなあに…」は、てんかんの激しい発作を繰り返しながらも生きて来た奈緒ちゃんの、自分のカラダの底から湧き上がって来た「いのち」の想いにたどり着いた言葉のような気がする。

「やさしくなあに」いい言葉だと思いませんか？

時々「ケンカしちゃいけないヨ…、やさしくなあにって言わなくちゃ、ねえ」と言ったりもする。

「仲良ししなきゃ…戦争なんかしちゃ、駄目だよ！！」と言ってるのかなあ。

奈緒ちゃん言葉と言うよりも、奈緒ちゃんが触れてきた「いのち」が語りかける想いを、代弁しているのだ。

ヒューマンドキュメンタリーは「いのち」を見つめることで、その時代を、社会を、しっかり見つめることになる。

「やさしくなあに…」

私が大好きな、奈緒ちゃん言葉に耳を澄ませてほしい。

桜が咲いて散る頃には完成させたい、と願っていた新作『大好き』。

「いのち」に触れるドキュメンタリー、映画『大好き』を大好きになってほしい。